

その4 ペットについて相談してみましょう

行政機関などでも、ペットに関する相談を受け付けています。

◆ 東京都動物愛護相談センター

動物愛護相談センター本所（電話番号：(03) 3302 - 3507）、多摩支所（電話番号：(042) 581 - 7435）では、ペットに関する相談を受け付けています。また、新しい飼い主探しの助言や協力をお願いできるボランティア団体を紹介しています。

なお、どうしても飼いきれなくなり、新しい飼い主を見つけられない場合には、犬と猫の引取りを行うこともありますが、事前相談が必要です。

◆ 東京都動物愛護推進員

動物愛護推進員は、動物愛護と適正飼養の普及啓発を行うボランティアで、ペットの飼い方やしつけ方の相談に応じたり、動物の保護、新しい飼い主探しのお手伝いをしたりするなどの活動を行っています。動物愛護の推進に熱意と識見を有する方々の中から、都知事が委嘱しています。ペットに関して困ったことがあったら、動物愛護推進員に相談してみてもいいかもしれません。



動物愛護推進員は、東京都保健医療局健康安全部環境保健衛生課（電話番号：(03) 5320 - 4412）や、区市町村の窓口でご紹介しています。

◆ 区市町村の窓口

区市町村（役所や保健所）でもペットに関する業務を行っており、ボランティアの紹介、しつけ方教室やペット相談会を開催している場合があります。

その5 ペットの“万が一”に備える

多くのペットは人よりも早く歳をとり、飼い主はペットの最期を見届けることとなります。かけがえのないペットが最期を迎える際に、飼い主としてどのようなことができるのか、考えておきましょう。

◆ 治療

ペットの死因は、悪性腫瘍や心臓病、腎不全など様々であり、それに対応するための獣医療も日々進歩しています。また、延命目的の治療のほか、苦痛を軽減し生活の質を向上させるための終末期医療（ターミナルケア）など、治療の考え方も多様化しています。ペットのためにどのような獣医療を選ぶのか、かかりつけの動物病院とよく相談して決めましょう。



◆ 看取り

ペットの死は辛く、悲しいことですが、看取りは飼い主がペットに愛情を注ぐことのできる最後の機会です。ペットが幸せな最期を迎えられるように、残された時間をどのように過ごすか、よく考え、悔いのない選択をしましょう。

ペットロス

「ペットロス」とは、ペットを亡くした飼い主の体験や、それによる悲しみのことを言い、決して珍しいことではありません。悲しい気持ちを人に聞いてもらったり、十分な休養をとったりするなど、一人で抱え込まず、無理をせずにペットの死と向き合しましょう。

その6 飼い主の“万が一”に備えましょう

突然の事故や病気などで、ペットとの暮らしが急転してしまうかもしれません。

万が一ペットより先に死亡した場合などに備えて、ペットのことを十分に考えておきましょう。



◆ ペットのための遺言を残す

ペットのために遺言書を残しておくこともできます。弁護士や行政書士などに相談して、ペットを誰に託すか、ペットのためにどのように財産を残すかなどを整理し、法的に有効な遺言書を作っておきましょう。また、ペットを他の人に譲り、飼育を託したいと思っている場合には、譲りたい相手から承諾を得ておくことも大切です。



◆ ペットのための信託を利用する

ペットのために信託会社へお金を預けておき、いざとなったら、そのお金をペットのために使用することができる仕組みがあります。飼い主は、あらかじめ、ペットの世話を誰にしてもらおうか決めておきます。預けたお金は、ペットのために使われます。



遺言や信託については、弁護士、司法書士、行政書士、保険会社に相談してみましょう。区市町村の法律相談窓口などを利用するのもよいでしょう。

🐾 動物とのふれあい方いろいろ 🐾

ペットと一緒に暮らすこと以外にも、動物と親しんだり、お世話をしたりする方法があります。

◆ ボランティア活動を通じた動物とのふれあい

ペットの世話をお手伝いするボランティア活動も行われており、活動を通じて動物と触れ合う機会を持つこともできます。保護している動物達の世話や新しい飼い主に出会うまで一時的に自宅で飼育するボランティアを募集している動物愛護団体もあります。動物に関われるボランティアの募集がないか、インターネットや情報誌で調べてみてはいかがでしょうか。



◆ 動物園もいろいろです



最近の動物園は、より近くで動物の生態を観察することができるよう工夫され、子供から大人まで十分に楽しめる空間に変化してきています。また、動物とふれあうことができる広場がある動物園もあります。

◆ バードウォッチング

海、山、川など大自然の中で時間を過ごすことが楽しめます。

動物由来感染症（動物から人に感染する病気）への注意

動物には症状がなくても、免疫力の低下したシニア世代の方が感染すると、重症になることがあります。口移しで食べ物を与えるなど過度の接触は避け、動物に触ったら手を洗いましょう。